

スピノザにおける「存在しない個物」に関する定理

黒川 勲

The Proposition of “Non-Existing Singular Things” in Spinoza’s Philosophy

KUROKAWA, Isao

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第35巻第2号

2013年10月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 35, No. 2, October 2013

OITA, JAPAN

スピノザにおける「存在しない個物」に関する定理

黒川 勲*

【要旨】 スピノザ『エチカ』第二部定理8は「存在しない個物」について論じている。本稿では、この定理8の『エチカ』第二部における意義及び「存在しない個物の本質」の特性の解明を試みる。

『エチカ』第二部全体の主題は人間精神の存在論と認識論の確立である。この第二部において、「存在しない個物」に関する定理は、人間精神の存在論と認識論の原理である物心の並行論の具体的展開を担うものと考えることができる。また、「存在しない個物の本質」の特性は、神の属性に内在する現実的な潜在性を示していると思なすことができるのである。

【キーワード】 存在しない個物 形相的本質 潜在性 現実性

はじめに

本稿の目的は、スピノザの「存在しない個物」に関する定理及び関連する言表の検討を通して、『エチカ』第二部における「存在しない個物に関する定理」の意義及び「存在しない個物の本質」の特性を明らかにすることにある。

問題となる定理は次のものである。

「存在しない個物、あるいは様態の観念は、個物あるいは様態の形相的本質が神の属性の中にふくまれているのと同じように、神の無限の観念の中にふくまれていなければならない。(Ideae rerum singularium, sive modorum non existentium ita debent comprehendi in Dei infinita idea, ac rerum singularium, sive modorum essentiae formales in Dei attributis continentur.)」(E.2.P.8)

西洋思想史においても特異なスピノザ哲学の性格は必然主義にある。その存在論において、『エチカ』では実体概念の厳格な展開によって、実体は本性的存在者であることが示され(E.1.P.7)、その実体こそが唯一の神であり(E.1.P.14)、そして神は自然と等置される(E.4.Praefatio)。さらに、その神は本性の必然性から無限に多くのものを生じる絶対的な第一原因であり(E.1.P.16)、一切は神の本性の必然性から一定の存在と作用へと定められ、すべての存在者において何一つ偶然的なものはない(E.1.P.29)。また、その必然主義は倫理学においては自由意志

平成25年5月31日受理

*くろかわ・いさお 大分大学教育福祉科学部社会認識教育講座 (哲学)

を否定する決定論となる。神においてさえ自由意志は存在せず(E.1.P.32), その神の活動は自らの本性の法則による自体的かつ必然的な活動である(E.1.P.17)。人間においてはなおさら意志の自由による活動は存在せず, すべての活動は他の原因によって決定されている(E.2.P.48)。このような事態を現実性と可能性の概念によって換言するならば, スピノザ哲学の特徴は徹底した必然主義により, 一切の現実の存在者は他のものではありません, この現実の存在者であるという, 可能性を完全に排除した現実性の一元論にある。それ故に, 存在しなかったが他のものでありえた, あるいは存在しないが他のものでありうると解釈される, いわば可能的な存在の本質や観念についての言表, しかもそれらが神の中に位置づけられる言表は, その意義を質しておかなければならない。

本稿の論述を開始するにあたって, まず先の定理 8 の『エチカ』第二部における位置づけを確認する。続いて, スピノザの他の著作での存在しない個物についての言及や先行する解釈を参照しながら, 直接に定理 8 の内容に関する説明を進めたい。

I 「存在しない個物」に関する定理の位置

『エチカ』第二部は「精神の本性と起源について」と題され, 人間精神の成立すなわち人間精神の存在論と人間精神の働きすなわち認識論が記述されることになる。『エチカ』第二部の総定理は 47 個を数えるが, それらの諸定理が扱う内容によって, 『エチカ』第二部の議論の階層を浮き彫りにすることができる。『エチカ』第二部の構成は次のように見なすことができる¹⁾。

- ① 定理 1-9 : 「神の中における対象とその観念の在り方, 並行論」
- ② 定理 10-13 : 「身体の観念としての人間精神」
- ③ 物体論に関わる補助定理 1-7 : 「人間精神の基礎となる身体(物体)の本性の解明」
- ④ 定理 14-36 : 「非十全な観念・認識」
- ⑤ 定理 37-49 : 「十全な観念・認識」

『エチカ』第二部の構成から, 定理 8 は身体の観念としての人間精神の成立(E.2.P.13)を論じる②の部分の基礎づけとして, 対象とその観念の関係が一切のものの原因である神との関連において示される①の部分に位置している。そして, ①の部分は人間精神の成立(②の部分)の基礎づけのみならず, 人間精神の働きすなわち認識論を論じる③及び④の部分の展開を支える役割をもっている。「存在しない個物」に関する定理の位置づけにあたって, まずは定理 8 の属する①の部分の議論の展開を確認したい。

「個々の思惟 (*singulares cogitationes*)」は, 一切のものの原因である神の本性を一定の仕方方で表現する様態である。そうしてみれば, 思惟の様態が帰属する神の属性が存在していなければならない。

「思惟は神の属性である。あるいは神は思惟するものである。(Cogitatio attributum Dei est, sive Deus est res cogitans.)」(E.2.P.1)

このような様態の帰属関係は「延長 (*extensio*)」においても同様であり, 延長は神の属性となる

(E.2.P.2)。

こうして、思惟の属性をもつ神は一切のものの原因として、すべてのものの観念を形成し、自らの中に保持することができる。すべてのものの観念とは、まさに神自身の本質及び神の本質から生じてくるもの一切を意味している²⁾。

「神の中には、神の本質の観念とその本質から必然的に生じるすべてのものの観念が必然的に存在する。(In Deo datur necessario idea, tam ejus essentiae, quam omnium, quae ex ipsius essentia necessario sequuntur.)」(E.2.P.3)

しかしながら、神の中にすべてのものの観念が存在するという言表によって、神がそれらの思惟と観念に基づいて、自由意志によって創造や破壊を行う権利や能力をもつと考えてはならない。神は自由意志によってではなく、自らの本性の必然性によってすべてのものを生じるのである(E.2.P.3.S)。そして、神は唯一であるから、すべてのものがそこから生じる神の本質の観念はただ一つとなる(E.2.P.4)。

ところで、観念が質料的にもつ対象の内容ではなく、様々な観念自身の存在、すなわち観念の「形相的存在 (esse formale)」の原因は、属性間の相互独立性から、属性の異なる対象そのものでは決してなく、神自身を原因としなければならない(E.2.P.5)。もちろん神自身を原因とするといっても、観念の原因としての神は思惟の属性を通して考えられた神であり、対象の属する異なる属性を通して考えられた神ではない(E.2.P.6)。観念と対象の関係は一般に相互に限定しあう因果関係として捉えられるが、スピノザにおいては各々の属性を通して考えられた神を原因とすることから、あらためて観念と対象の関係が問題となる。スピノザにおいて観念と対象は直接的な因果的相互関係はない。しかしながら、創造神がそうすると考えられているように、思惟の様態ではない対象の形相的存在を、神が「事前に (prius)」対象の観念を形成し、続いて「事後に」生み出すのでもない(E.2.P.6.C)³⁾。

そうしてみれば、観念と対象の関係はどのように解されなければならないのであろうか。すべてのものがそこから生じる神の本質はただ一つである。そして、神は唯一の自らの本性の必然性によってすべてのものを生じるのであるから、観念の生じる系列とものの生じる系列とは同一の秩序をもつことになる。

「観念の秩序と連結はものの秩序と連結と同じである。(Ordo, & connexio idearum idem est, ac ordo, & connexio rerum.)」(E.2.P.7)

この物心の並行論に従えば、神の本性から形相的に生じるすべてのものは、同じ秩序と連結によって、神の中に「想念的 (objective)」に観念として生じるのである(E.2.P.7.C)。また、このことは延長の様態とその様態の観念、ものとその観念、対象とその観念とは「同じ一つのものであって、ただそれらが二つの仕方で表現されているにすぎない」(E.2.P.7.S)ことを意味しているのである。続いて、本稿で問題としている定理 8 が登場することになる。

こうした物心の並行論において、仮に現実には存在しない個物を想定するならば、その個物の「形相的本質 (essentiae formales)」—すなわち個物の観念が質料的にもつ本質の内容ではなく、その本質自身—が神の属性の中にふくまれているのと同じように、存在しない個物の観

念は神の無限の観念の中にふくまれていなければならない(E.2.P.8)。しかしながら、この議論は当然、存在する個物についても適合する。すなわち、存在する個物が神の属性の中にふくまれているのと同じように、その観念は神の無限の観念の中にふくまれていなければならない。しかも、その存在する個物が「持続するといわれる限り (*quatenus etiam durare dicuntur*)」、その観念も持続的な存在をもつことになるのである(E.2.P.8.C)。ところで、神の属性の中にふくまれている現実に存在する個物、あるいは持続的な存在をもつといわれている現実に存在する個物の原因は、もちろん神である。しかしながら、それは無限な神ではありえない。有限な個物の原因として考えられるのは有限な個物でなければならない(E.1.P.28)。それ故、有限な個物の原因として考えられる神は有限な様態に変様化した限りの神でなければならない。

「現実に存在する個物の観念は、無限である限りの神を原因とするのではなく、現実に存在する他の個物の観念に変様化した限りの神を原因とする。(*Idea rei singularis, actu existentis, Deum pro causa habet, non quatenus infinitus est, sed quatenus alia rei singularis actu existentis idea affectus consideratur*)」(E.2.P.9)

現実に存在する個物の観念に関する、こうした事態は普遍的にあらゆる観念—存在しない個物の観念をも含め—に適合しなければならない。すなわち、ある有限な観念の原因は思惟の属性によってのみ考えられた、有限な思惟の様態に変様化した限りの神としての観念である。個物の認識という側面に目をやるならば、並行論によって、あらゆる対象・個物について神の中に観念が存在する。すなわち、神の中にすべての認識が存在しているのである。

これまで、定理 8 の『エチカ』第二部における位置づけを確認するため、『エチカ』第二部で論じられる人間精神の成立(人間精神の存在論)と人間精神の働き(人間精神の認識論)の基礎づけとして、対象とその観念の関係が神との関連において示される①の部分の議論を見てきた。この部分の議論は思惟と延長、観念と対象、観念と個物の関係を主題としている。そうして見ると、①の部分の論証の到達点は、物心の並行論を確立する定理 7 と言えるであろう。この点を踏まえて定理 8 の役割について言うならば、定理 8 は続く人間精神の存在論と認識論を見据えた並行論の具体化を担うものと考えられることができる⁴⁾。なぜなら定理 8 によって、並行論が存在しない個物及び存在する個物、すなわちすべての具体的な個物に適用されることが示される。さらに、ものの持続のような具体的な存在論的性格についても、平行する観念と個物については対応しなければならないことが示されるからである。そして、このような厳格な観念と個物の並行論が人間精神の成立に適用されるならば、現実に存在する人間の精神は、延長の様態に対応する神の思惟の様態であるとともに、人間身体を対象とする「身体の観念あるいは認識 (*idea, sive cognitio Corporis*)」となるのである。

「人間精神を構成する観念の対象は身体である。あるいは現実に存在する延長の様態であって、それ以外のものではない。(*Objectum ideae, humanam Mentem constituentis, est Corpus, sive certus Extensionis modus actu existens, & nihil aliud.*)」(E. 2. P. 13)

また、観念と個物の並行論が人間精神の働きに適用されるならば、定理 9 が示すように並行論

によってあらゆる対象・個物について神の中に観念が存在する。すなわち、神の中に認識が存在することになる。そして、この神の中の認識が人間精神を構成すると見られるとき、人間精神はその対象・個物を認識していると捉えられるのである。

「人間精神についても神の中に観念あるいは認識がある。しかも、この観念あるいは認識は、人間身体の観念あるいは認識と同じような仕方でも神の中に生じ、また神に帰せられる。(Mentis humanae datur etiam in Deo idea, sive cognitio, quae in Deo eodem modo sequitur, & ad Deum eodem modo refertur, ac idea sive cognitio Corporis humani.)」
(E.2.P.9.C)

このように、定理 8 は『エチカ』第二部において、第二部の主題である人間精神の存在論と認識論を見据え、並行論の具体的展開を担う起点として考えることができる。続いて、本稿で問題としている定理 8 の内容に関して直接に解明を進めていきたい。

Ⅱ 「存在しない個物」に関する定理

1 定理 8 全体の内容

『エチカ』第二部定理 8 をあらためて引用し、その証明、定理から導き出される系、より定理の内容を解き明かす注解の分析を開始する。

「存在しない個物、あるいは様態の観念は、個物あるいは様態の形相的本質が神の属性の中にふくまれているのと同じように、神の無限の観念の中にふくまれていなければならない。」(E.2.P.8)

この定理 8 の証明は定理 7 から明らかであり、また定理 7 の注解から一層明らかであるとされる。すなわち、定理 7 で確立された「観念の秩序と連結はものの秩序と連結と同じである」という並行論に従えば、先に述べたように仮に現実には存在しない個物を想定するならば、その個物の形相的本質が神の属性の中にふくまれているのと同じように、平行的に対応して、存在しない個物の観念も神の無限の観念の中にふくまれていなければならない。唯一の神の同一の秩序と連結による個物の成立という観点から見れば、まさに定理 7 注解が明確に示すように「同じ一つのものであって、ただそれらが二つの仕方でも表現されているにすぎない」のであり、その個物の形相的本質が神の属性の中にふくまれているならば、その観念も神の無限の観念の中にふくまれていなければならないのである。

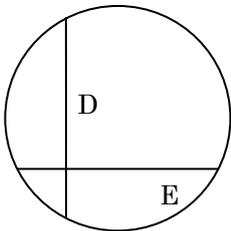
ただし、ここで注意しておかなければならないのは、議論の主題は現実には存在しない個物を想定した、存在しない個物の「観念」である。つまり、存在しない個物の観念の事実からはじまっていることである。何か一定の存在しない個物の観念が存在している。その観念の対象は、神における位置づけの観点をとるならば、並行論から形相的本質として神の属性の中に一例え延長の属性—ふくまれている。ひるがえって、その存在しない個物の観念の在りかは、並行論に基づき神の観念の中でなければならないのである。

この議論の進行は、続く定理 8 の系における存在する個物の観念についても同様である。す

なわち、何か一定の個物が存在し、その個物の観念が存在している。その個物の観念の対象は、神における位置づけの観点をとるならば、並行論から神の思惟以外の属性の中にふくまれている。他方、個物の観念の在りかは、並行論に基づき神の観念の中でなければならないのである。このようにして、存在するにしろ、存在しないにしろ、ある個物の観念は神の観念の中に位置づけられるが、存在する個物の存在論的性格については、「一種の量 (quaedam quantitatis species)」で計測される「持続 (duratio)」において捉えることができる。そのような持続的に捉えられた個物を対象とする観念も、また並行論に基づいて持続的な性格をもつと見なさなければならない。

「個物が神の諸属性の中にふくまれている限りにおいて存在するだけでなく、また持続していると言われる限りにおいて存在する場合、個物の観念も持続すると言われる存在をふくむことになる (ubi res singulares dicuntur existere, non tantum quatenus in Dei attributis comprehenduntur, sed quatenus etiam durare dicuntur, earum ideae etiam existentiam, per quam durare dicuntur, involvent.)」(E.2.P.8.C)

このようにしてスピノザは定理 8 によって、並行論が存在しない個物及び存在する個物、すなわちすべての個物を射程にいれていることを示すが、さらに定理 8 の注解において、幾何学の事例を用い、定理 8 及び定理 8 系の内容について説明を加えている。定理 8 注解では円の中で交わる 2 直線 (D, E) が円内の交点で分割されるが、円内の交点と円周上の 2 つの交点と



[E. 2. P. 8. S の図]

からなる線分の比は互いに等しい。あるいは、分割された 2 直線からなるそれぞれの長方形の面積は等しいという、いわゆる「方冪の定理 (ほうべきのていり)」が取り上げられている⁵⁾。そして、スピノザはこうした定理が成立する根拠は円の本性にあり、それ故このような長方形は円が存在する限りにおいて存在し、同様に長方形の観念は円の観念に含まれている限りにおいて存在すると主張する。そして、ここでは具体的な現実の 2 直線 (D, E) によって、2 つの長方形のみが

一存在する個物として一存在している。一方、2 本の直線の無数の引き方によって、円の中には互いに等しい長方形が一存在しない個物として一無限に多く存在すると見なすのである。

2 存在しない個物の潜在性

それでは「存在しない個物」とは何を意味しているのでしょうか。ドゥルーズは存在しない個物の本質について、「論理的可能性 (possibilité logique)」ではなく、「物理的実在性 (réalité physique)」と考えている⁶⁾。確かに、スピノザにおいて創造する神の知性の存在は認められないのであるから、神の知性の中の可能的な事物の概念である論理的可能性ではありえない。それは、もちろん実在的なものでなければならぬが、ドゥルーズは一般に様態の本質を神の力能の一部分としての実在と考え、また存在しない個物の本質を思惟の属性とは異なる延長の属性に位置づけられるものとして、物理的実在性で見なしているのである。こうしたドゥルーズの見解に見られるように、確かに存在しない個物の本質は論理的可能性ではなく、実在的なものでなければならない。しかしながら、そこから直ちに属性の類によって存在しない個物の本

質を同定するのではなく、まず長方形は「円が存在する限り (quatenus circulus existit)」において存在し、長方形の観念は「円の観念の中にふくまれる (quatenus in circuli idea comprehenditur)」という本質の在り方を明確にしておかなければならない。

円の中には無数の存在していない長方形がふくまれている。その無数の長方形の一つが、2直線 (D, E) が具体的に引かれ「存在する (existere)」ことによって、「存在 (existentia)」をもつようになる。そして、この「具体的存在」によって円の中に内在し潜在している長方形の一つが、外在化し顕在化すると考えられる⁷⁾。そしてまた、そのことによって、円の中に内在し潜在している、他の無数の長方形と決定的に区別されるのである。

この「内在しているものの外在化」、「潜在しているものの顕在化」という構造は、スピノザの初期の著作『短論文』の言及にも見ることができる⁸⁾。スピノザは『短論文』第二部第二附録「人間の精神について」において、まだ存在しない様態について言及し、存在しない様態も存在する様態と同様に神の属性の中にふくまれていると見なしている⁹⁾。そして、存在しない様態とその本質は、属性の中では他の諸様態との間に「不等性 (ongelykheid)」はなく、他の諸様態と区別されることはない。一方、これらの様態が「自然の中 (in de Natuur)」で「個別性 (byzonder)」をとるならば、その本質に関しても、またその観念に関しても個別性が現れるのである。また、『短論文』第二部第二十章においても同種の言及がある¹⁰⁾。すなわち、事物の本質はその事物が存在していなくても理解されうる。しかし、その本質の観念は個別的なものを見なすことはできない。その本質の観念が個別的に捉えられるのは、以前は存在しなかった事物が存在するようになるからであり、その事物の本質に「存在 (wezentlykheid)」が付与した場合に可能となるのである。スピノザはこの事態を説明するために、全面が白い壁のままである場合は、その壁の中に個別的なあれこれは存在しないという例を挙げている。すなわち、存在しない個物とその本質は神の属性の中に、確かに内在し潜在的に存在しているが、個別性をもつと見なされるためには、具体的存在をもって外在化し、顕在化しなければならないのである。

このようにして見ると、存在しない個物の本質の在り方とは、神の属性に内在する潜在性と捉えることができる。スピノザにおいて、存在しない個物の本質とは、論理的可能性ではなく実在的なものでなければならない。そして、その実在的な本質の在り方は、神の属性において外在化する以前の内在、顕在化に先立つ潜在と考えなければならない。

3 存在しない個物の現実性

しかしながら、存在しない個物の本質の在り方を神の属性に内在する潜在性で見なすとしても、それは決して隠れており、不明なままの認識不可能なものではない。スピノザにおいては、存在しない個物の本質は現実性をもつと考えなければならないのである。スピノザは現実性について、次のような見解を示している。

「われわれは二つの仕方によってものを現実的なものとして考える。すなわち、一定の時間と場所に関係して存在するものとしてか、あるいは神においてふくまれ、神の本性の必然性から帰結するものとして考えるかである。(Res duobus modis a nobis ut actuales concipiuntur, vel quatenus easdem cum relatione ad certum tempus, & locum existere, vel quatenus ipsas in Deo contineri, & ex naturae divinae necessitate consequi

concipimus.)」(E.5.P.29.S)

スピノザの現実性に関する見解は二様のものである。すなわち、「一定の時間と場所に関係して存在する」現実性と、「神においてふくまれ、神の本性の必然性から帰結する」現実性である。「一定の時間と場所に関係して存在する」現実性は、物理学的な現実性として、想像力¹¹⁾において捉えられる「経験的現実性」と見なすことができる。一方、「神においてふくまれ、神の本性の必然性から帰結する」現実性は、スピノザの徹底した必然主義によってもたらされる存在論的な現実性として、知性において捉えられる「知性的現実性」と見なすことができる¹²⁾。換言すれば、経験的現実性とは、「一定の時間と場所に存在するもの」は同時に「他の時間と場所に存在すること」が不可能な、「その在りか」がただ一つに定まる現実性である。一方、知性的現実性とは、唯一の神から必然的に生じる故に、この世界は他の世界であることが不可能な、「世界」がただ一つである現実性を示している。

こうしたスピノザによる現実性の見解を踏まえるならば、存在しない個物の本質は、経験的現実性ではなく、知性的現実性を示すと考えなければならない。存在しない個物の本質は神の属性の中に内在し潜在している。その限り、想像力において経験的に捉えることはできない。しかしながら、神の属性の中にある限り、その原因としての神による必然性によって知性的に捉えることができるのである¹³⁾。すなわち、存在しない個物の本質もまた、唯一の神の必然性からただ一つに定まったこの世界に、確かに実在として知性に現れるのである。

結語

これまで、スピノザの『エチカ』第二部定理 8 の「存在しない個物に関する定理」の意義及び「存在しない個物の本質」の特性を明らかにするため、定理 8 の『エチカ』第二部における位置づけ及び定理 8 の内容に関する考察を行ってきた。

まず、「存在しない個物に関する定理」の意義とは、『エチカ』第二部全体の主題である人間精神の成立（人間精神の存在論）と人間精神の働き（人間精神の認識論）の原理となる物心の並行論の具体的展開を担う起点として考えることができる。スピノザにおいて、一切は神の必然性から生じる。それ故に、存在するものも存在しないものも、すべて神の必然性によって認識されなければならない。また、人間の知性による認識、想像力による認識、それらにともなう多様で多彩な観念も、すべて神の必然性によって説明されなければならない。存在しない個物が想定され、存在しない個物の観念という事実がある以上、それらもスピノザ哲学において位置づけられ、説明されなければならない。こうした要請のもと、定理 8 は存在しない個物の本質も並行論の具体的適用によって、神の属性の中に位置づけられることを示す。そしてまさに、そのことによって存在しない個物も認識され、説明されることが可能となるのである。

続いて、「存在しない個物の本質」の特性に言及するならば、それは神の属性内に内在する潜在性と捉えることができる。スピノザにおいて、存在しない個物の本質とは、創造神の知性内の論理的可能性ではなく、実在的なものである。そして、その実在的な本質の在り方は、神の属性内に内在する、顕在化するものの潜在的在り方と考えなければならない。しかしながら、その潜在性は不明性を意味してはいない。スピノザにおいて、存在しない個物の本質は潜在的であると同時に、まさに神の属性内に存在する故に、神の必然性によって知性的に捉えることがで

きる「知性的現実性」を示していると考えなければならない。

このようにして「存在しない個物」に関して考察してきたが、存在しない個物の具体的観念とは何か、それらのスピノザ哲学における意義とはどのようなものかについては、さらなる検討が必要である。存在しない個物の観念とは、虚構の観念、未来表象、過去表象などが該当すると推定されるが、この課題についての論考は稿をあらためたい。

注

『エチカ』における言及には、その末尾に言及箇所を略号で示す。『エチカ』第二部定理 13 の補助定理 3 の後にある公理は、E.2.post P.13-L.3.A.2 である。また、D.は定義、Dem.は証明、C.は系、S.は注解を指す。また、本稿の論述において重要と見られる定理等については、引用文に原文を付す。原典は次の通りである。[Spinoza: *Ethica*, Spinoza Opera Bd. II, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von Carl Gebhardt, Carl Winter, 1972.]

1) ドゥルーズは『エチカ』第二部の定理構成を以下のように示している。

- ①定理 1-7 「観念とその対象の認識論的並行論、精神と身体の存在論的並行論」
- ②定理 8-13 「観念の諸条件、すなわち、神が本性に応じてもつ観念、われわれが本性と身体に応じてもつ観念」
- ③自然学の説明「物体のモデル」
- ④定理 14-36 「われわれが諸観念をもつときの諸条件はこれらの観念を必然的に非十全なものとしている。つまり、自己自身の観念、自らの身体の観念、他の物体の観念を非十全なものとする」
- ⑤定理 37-49 「十全な観念はいかにして可能か。あらゆる物体に共通なもの、あるいはいくつもの物体に共通するもの」

[G・ドゥルーズ、『スピノザと表現の問題』、「附録 『エチカ』の計画とこの計画が実現された際の注解の役割についての形式的研究—二つの『エチカ』」、工藤喜作他訳、法政大学出版局、1991、p.361- p.362], [Deleuze: *Spinoza et problème de l'expression*, Éditions de Minuit, 1968, p.313-p.314]

本稿においては、このドゥルーズの見解を参考にしたが、①と②の部分については独自の分類を行っている。

2) スピノザにおいて、神の属性の絶対的本性から生じるものは「直接無限様態」と考えられ (E.1.P.21)、直接無限様態を「媒介して」生じるものは「間接無限様態」と考えられている (E.1.P.22)。

直接無限様態と間接無限様態が、それぞれ何を意味しているかについては幾つかの議論がある。例えばロビンソンは延長の属性に関しては、直接無限様態を「運動と静止」とし、間接無限様態を「全宇宙の相」としている。また、思惟の属性に関しては、直接無限様態を「神の観念あるいは神の本質の観念」とし、間接無限様態を「神の本質から必然的に生起するすべてのものの観念」として、同時に両無限様態を「無限知性」と見なしている。[Lewis Robinson: *Kommentar zu Spinozas Ethik*, Felix Meiner, 1928, p.311]

スピノザ自身の言及としては書簡 64 において、シェーラーの「神から直接に産出されるものと無限な様態的変様を媒介して産出されるものの例」の問いに答えて、直接無限様態を思惟においては「絶対無限知性(intellectus absolute infinitus)」、延長においては「運動と静止(motus et quies)」としている。また、間接無限様態を「全宇宙の相」としている。[Spinoza: *Epistolae*, Opera Bd. IV, Epistola No.64, p.278]

3) ここにも先の自由意志によって創造や破壊を行うという神理解への批判を見て取ることができるだろう。スピノザの神は、神が前もって形成した神の知性の中の観念を、自由意志によって選択し実行する創造神ではありえないのである。

- 4) 定理 8 の『エチカ』全体への関わりは次の箇所に見て取ることができる。

『エチカ』第二部 (E.2.P.9, E.2.P.11, E.2.P.15, E.2.P.45)

『エチカ』第三部 (E.3.P.11.S)

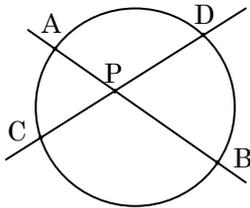
『エチカ』第四部 (言及なし)

『エチカ』第五部 (E.5.P.21, E.5.P.23)

これらへの言及にあたっては、存在しない個物についての直接的な内容ではなく、正確には定理 8 の系の内容—「存在する個物が持続するといわれる限り、その観念も持続的な存在をもつ」—が示されている。すなわち、持続的な観念あるいは持続的に見られた人間精神の説明として活用されている。

- 5) 方冪の定理は次のような表現、図及び証明で記述することができる。

「一つの円とその円周上にない 1 点 (P) が与えられていて、その点を通して円と交わる任意の直線 (AB, DC) を引くとき、直線と円との交点 (A B, D C) とその点 (P) とでできる二つの線分を二辺とする矩形 (くけい, 長方形) の面積は等しい。」



図

証明

右の図の $\triangle ACP$ と $\triangle DBP$ において

$\angle BAC = \angle BDC$ $\angle ACD = \angle ABD$ (円周角の定理)

すなわち $\triangle ACP \sim \triangle DBP$ (相似条件の二角相等)

よって $PA:PC = PD:PB$

ゆえに $PA \cdot PB = PC \cdot PD$

上記の証明は現在よく採用される一般的な証明の一つを示した。

この定理は『ユークリッド原論』3巻「円について」定理 35 にあたる。しかし、ユークリッド原論での証明は上記の証明と異なる。[『ユークリッド原論』, 中村幸四郎・寺阪英孝・池田美恵・伊東俊太郎 訳・解説, 共立出版, 1996, p.75-p.76]

- 6) [Deleuze: *Spinoza et problème de l'expression*, p.175] あるいは, [Deleuze: *Spinoza ; Practical Philosophy*, City Light Books, 1988, p.65/p.67]
- 7) こうした存在しない個物の本質の在り方を「潜在性」と見なすのは上野の見解である。本稿での解釈も上野の解釈の方向を踏襲するものである。存在しない個物の本質については、上野の論文に次のような記述がある。「現に存在しない個物があるとしたら、その本質は現実に、しかし潜在的なものとして、神の属性の中に含まれていなければならない。」[上野修, 「ライプニッツとスピノザ—現実性をめぐって—」, 『哲学の探求』, 36号, 哲学若手研究者フォーラム, 2009, p.15]
- また、定理 8 の内容の分析に関しては、柏葉の論文から多くの知見と示唆をえた。[柏葉武秀, 「スピノザにおける精神の永遠性: ライプニッツの批判に抗して」, 北海道大学文学研究科紀要, 124号, 2008]
- 8) 『短論文』での言及箇所の指摘はドゥルーズによる。[Deleuze: *Spinoza et problème de l'expression*, p.177]
- 9) [Spinoza: *Korte Verhandeling*, Opera Bd. I, p.119]
- 『短論文』の翻訳にあたっては, [Edwin Curley (edited and translated): *The Collected Works of Spinoza I*, Princeton University Press, 1985] を参照した。
- 10) [Spinoza: *Korte Verhandeling*, p.97]
- 11) 想像力とは、まず「身体の変様の観念 (idea affectionis Corporis)」であり、ものを「現在の (praesentia)」, 「観想する (contemplari)」能力である (E.2.P.17.S)。そして、この能力は諸観念の連結に注目するならば「記憶 (memoria)」の意を含むものである (E.2.P.18.S)。また、スピノザは想像力を、自らの認識論における区分において「第一種の認識 (cognitio primi generis)」として、感覚を示す「漠然とした経験による認識 (cognitio ab experientia vaga)」及び「記号

び「記号から(ex signis)」形成されるある種の認識を意味するものとして用いている。すなわち、スピノザにおいて想像力は原初的な認識であるとともに、多様な意義を示すものである。一方、このように多様な意義をもつ想像力は、「理性(ratio)」による認識を示す「第二種の認識」及びいわゆる「直観な(intuitu)」認識を示す「第三種の認識」と厳格に区別され、虚偽の唯一の原因として、一括して否定的に位置づけられている(E.2.P.40.S.2)。[拙稿「スピノザにおける想像力について」、大分大学福祉社会科学研究科紀要, 10号, 2008年]

- 12) スピノザの二様の現実性, 「経験的現実性」と「知性的現実性」については, [拙稿「スピノザにおけるコナトゥスの現実性」, 大分大学福祉社会科学研究科紀要, 7号, 2007年] で論じている。
- 13) 次の表は筆者が定理 8 全体の内容と本稿の論述を合わせ, スピノザにおける個物・有限様態を存在・本質・現実性の観点から整理して一覧として作成したものである。※「現実的存在(essentia actualis)」としたのは『エチカ』第三部定理 7 の内容を参考にした。

[表] 個物・有限様態の存在・本質・現実性

	存在	持続の相	本質	現実性 ①	現実性 ②
個物 ・ 有限様態	existentia	non in duratio	essentia finita [essentia formalis]	知性的 現実性	
		in duratio	essentia finita ※[essentia actualis]		経験的 現実性
	non existentia		essentia finita [essentia formalis]		

付記：本稿は平成 25 年度日本学術振興会科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金・基盤研究 C）による研究成果の一部である。

The Proposition of “Non-Existing Singular Things” in Spinoza’s Philosophy

KUROKAWA, Isao

Abstract

In this paper I tried to understand the signification of the proposition (E.2.P.8) of non-existing singular things and the properties of them in Spinoza’s philosophy. For this purpose I investigated into Spinoza’s arguments of the nature and origin of human mind in his Ethica pars 2. According to Spinoza, the parallelism between the mental

and physical realms is the most important theory in his epistemology and ontology of human mind. The proposition (E.2.P.8) plays a part to give shape to the parallelism. And the formal essence of non-existing singular things has the reality and is considered as the actual latency in attribute of God.

【Key Words】 Non-existing singular things, Formal essence, Latency, Actuality